

絹のふるさと京丹後推進プラン
～絹のふるさと京丹後から
新しい時代のシルクロードを世界に向けて～

平成28年3月30日

絹のふるさと京丹後推進会議

「絹のふるさと京丹後推進プラン」最終とりまとめにあたって

私たちは、国内でも有数の絹織物産地として長い歴史と文化を持つこのまちが、将来にわたって「絹」に関わりを持ち、産地の維持発展とともに市民の心に「絹のふるさと」としての愛着を育み、さらには世界からも「絹のまち」として認知されることを願って様々な施策・構想の議論・検討を重ねてきました。

検討の結果、3つの目指すべき方向を提言します。1つには、絹・シルクに関する産業と人材の集積地としての方向。具体的には、「①地場産業の再興に向けて新たな創造・展開を図り、次世代に引き継ぐための環境を確保すること。」「②生産地から加工、販売までを一気通貫し、その関連する産業技術及び人材の集積を図ること。」「③絹・シルクを活用し、創造性あふれる新たな産業を創出すること。」「④絹・シルク産業の安定的な産地経営を図り、地域の発展とともに次世代へつなげること。」また、2つめには、絹・シルクへの愛着と誇りを育む地域としての方向です。具体的には、「①新たな絹・シルク産業と文化の創造・発信に取り組むこと。」「②和の文化、きもの文化を大切に守り育て、その用途を広げること。」「③わが国のシルクに関連する産業や歴史・文化を持つ都市と連携すること。」さらに、3つめには、絹・シルクに関する情報発信地としての方向です。具体的には、「①絹・シルク産業とシルク文化を掘り起こして発信し、絹のふるさとを創造すること。」です。

東京オリンピック・パラリンピックが開催される2020年は、丹後ちりめん創業300年、丹後織物工業組合創立100年の節目でもあります。この機会を捉え、目指すべき3つの方向に向かって、計画的な施策の展開を希望し、ここに「絹のふるさと京丹後推進プラン」を提唱します。

目次

1. このプランの位置づけ	1
2. 絹・シルクの現状	1
(1) 直面する課題	
(2) 拡大する機会—シルクのまちづくりの取組—	
(3) 活用すべき強み	
(4) 克服すべき弱点	
3. 目指すべき方向	3
(1) 絹・シルクに関する産業と人材の集積地として	
(2) 絹・シルクへの愛着と誇りを育む地域として	
(3) 絹・シルクに関する情報発信地として	
4. 具体的対応	4
(1) 絹・シルクに関する産業と人材の集積化の取組み	
① 2020（平成32）年に向けて取組むこと	
A. 知のネットワークの構築・強化・活用	
B. 絹・シルク関連産業の集積・拡大及び環境整備	
C. 絹・シルク関連産業人材の確保・育成	
D. 絹・シルク関連産地の形成	
E. 都市間連携の強化	
F. 丹後織物工業組合の機能強化	
G. 2020年プロジェクトの構想と始動	
② 2024（平成36）年に向けて取組むこと	
H. ブランドの維持・強化と海外展開の推進、インバウンドの促進	
(2) 絹・シルクへの愛着と誇りを育むための取組み	
① 2020（平成32）年に向けて取組むこと	
I. 学校教育・社会教育の推進	
J. 歴史の理解促進と先人の顕彰	
K. 和装振興を地域振興、観光振興に	
② 2024（平成36）年に向けて取組むこと	
L. 丹後ちりめんへの敬愛の形成	
(3) 絹・シルクの情報発信地化の取組み	
① 2020（平成32）年に向けて取組むこと	
M. 情報発信の推進	
② 2024（平成36）年に向けて取組むこと	
N. 絹のふるさと京丹後の認知拡大	
5. 終わりに	8

1. このプランの位置づけ

このプランは、

- ◇第2次京丹後市総合計画及び京丹後市まち・ひと・しごと創生総合戦略に沿って、より具体的な方向性を示し、
- ◇政府に地域活性化モデルケースとして選定（2014(平成26)年5月29日）された取組み及び地域再生計画（2015（平成27）年1月22日認定）で国の認定を受けた取組みの実行を含むとともに、
- ◇京丹後市の「絹のふるさと」形成に向けたアクションプランとするもの。

2. 絹・シルクの現状

（1）直面する課題

◇伝統産業である織物業の再生

かつて2兆円規模と言われた呉服市場は毎年縮小。現在は2,700～2,800億円程度の規模となっている。丹後産地も、白生地織物に代表される後染織物はここ数年間で生産量が半減し、なおも減産基調が続いている。また、帯地に代表される先染織物は、近年西陣のメーカー段階でリスク軽減のため受注生産へのシフトが見られ、丹後産地での安定的な生産が困難になりつつある。生産現場は工賃の低下、作業者の高齢化、設備の老朽化などにより賃機の廃業が相次ぎ、産地としての規模の維持が困難な状況にある。

【キーワード】

- 生産現場の高齢化、工賃の低下、設備の老朽化
- 関連工程、生産規模の維持
- 生地メーカーからの脱却、完成品化への挑戦

（2）拡大する機会—シルクのまちづくりの取組—

- ◇（一財）大日本蚕糸会では、日本で製織された白生地及び日本で染織された国産絹製品に付すため「日本の絹マーク」を制定。また、国産の繭・生糸だけを使って製造された純国産の絹製品には、消費者に一目でわかるようにするため「純国産絹マーク」を制定し、純国産絹ブランドの確立を目指しているところ。
- ◇2010年1月、京丹後市の呼びかけにより、わが国のシルクに関連する産業や歴史・文化を持つ市区町村が連携し、「シルクのまちづくり市区町村協議会」が発足。活動目的の「シルク産業の活性化」や「シルク文化を活用した魅力ある地域づくり」に向け、会員市区町村がお互いに智恵を

出し合い、将来を展望した対応を行っているところ。26 市区町で構成
(2014年3月31日現在)

- ◇2014年6月「富岡製糸場と絹産業遺産群」の世界遺産登録を契機に、絹のみちと絹織物産地、絹関連事業者を結びつけた「絹のみち広域連携プロジェクト」が関東経済産業局を事務局に発足。地域の交流人口増加及び絹に関連する新商品・サービスの開発を図り、地域経済の活性化を促進することを目的に、「地域を超えた事業者連携による新ブランド・新商品の開発」「施設と産地体験等の連携による広域観光ルートの開発」など、関東圏域を中心にしながらも全国的な動きとなつての展開が始まっているところ。
- ◇経済産業省（繊維課）では、2015年1月、有識者から構成される「和装振興研究会」を設置。和装振興を地域振興、観光振興につなげていく方策について議論された。
- ◇2015年1月、(一社)日本ファッション産業協議会が日本繊維産業連盟協力の下、日本の技術と美意識の証である「J∞QUALITY」認証事業を立ち上げ、純国産商品の認証が始まっているところ。

【キーワード】

- 品質表示、原産地証明
- 連携
- 和文化・観光につなげる

(3) 活用すべき強み

- ◇丹後産地には、約300年間続けられてきた丹後ちりめんの生産によって培われた技術や文化を最大限活用し、知恵と工夫で現代にあった新たな製品開発を行える素地がある。
- ◇丹後の絹織物は、1300年も前の昔から奈良時代の天皇に献上されていた歴史を持つ。その技術の蓄積の上に現在の丹後ちりめん技術がある。絹織物に対する技術継承は現在も連綿と続いている。
- ◇国内最大の絹織物産地であるため、国内絹織物産業のリーディング産地としての地位を確立しているところであり、丹後織物工業組合はその役割を担う中核的機関でもある。

丹後ちりめん

本来ちりめん（縮緬）とは、タテ糸に無撚の生糸を使用し、ヨコ糸に強撚糸（メートル間に3000回前後）を用い、左右強撚糸を交互に打ち込んで織物とした後、精練により布面にシボを表した絹織物をいう。

【キーワード】

- 絹織物の歴史
- 産地の技術
- 丹後織物工業組合

(4) 克服すべき弱点

◇最近では、複数の機業が協調して男性用着物ブランドを国内市場で展開する動きがみられており、また、産地機業の中でも海外市場の獲得に向け、単独での市場開拓に臨む機業も出てきているところではあるが、丹後産地全体としては、まだまだ機業が相互に協調し、連携して取り組む事業活動は途上であり、網野町織物産地再構築ビジョン（2000年3月）でも述べられている状況は完全に解決しているとは言えない。

発注者に依存する「下請産地」であるため、個々の企業がそれぞれに京都の発注先と結び付き、タテの関係が中心になり、産地内での企業相互のヨコの関係は弱い。技術や売れ筋が盗まれることへの警戒もあって交流は少なく、狭い産地なので機業についての情報はいろいろ流れるが、機業同士の深い相互理解は形成されていない。また網野産地としてどこを目指すかについての共通した認識も作られていない。

（網野町織物産地再構築ビジョン3頁・2000年3月）

【キーワード】

- 海外展開
- 事業者間連携

3. 目指すべき方向

～絹のふるさと京丹後から 新しい時代のシルクロードを世界に向けて～

(1) 絹・シルクに関する産業と人材の集積地として

- ◇約300年の歴史を持つ丹後ちりめんの織物技術。創業期の情熱を現代に継承して地場産業を再興し、新たな創造・展開を図る中で次の世代に引き継いでいくための環境を確保する。
- ◇国内はもとより、世界に名だたる絹の都リヨン（フランス）や絹織物産地のコモ（イタリア）においても、最盛期に比べその規模は大きく縮小している。本市においては、絹・シルクをキーワードに「生産地から加工、販売」までを一気通貫して手掛ける裾野の広い産業集積を促進することで、その関連する産業技術及び人材の集積を図り、絹・シルクの活用においては、世界に冠たる「京丹後」を目指す。
- ◇絹・シルクは今日、布としての活用だけでなく、ヘルスケア製品やメディカル産業に至るまで、多様に活用できる天然素材として、その利用価値

は高く認知されている。創造性あふれる新たな産業を創出するには、非常に有望な素材として認めるところ。

◇人々のニーズを掘り起し、新たなチャレンジを繰り返して、絹・シルク産業の安定的な産地経営を図り、地域の発展とともに次の世代へつなげる。

(2) 絹・シルクへの愛着と誇りを育む地域として

◇絹・シルクは一般的に、和装はもとより、雑貨、インテリアなどでも用いられ、また茶道、華道など生活文化の表現においても活用されてきた。絹・シルクは、日本の文化、地域の文化を伝える力を持っていることを、多くの人々が認識している。絹・シルクについて、誰もが愛着と誇りを持ち、地域においてこの魅力をさらに高める中で、人や地域が世界に飛躍する原動力ともなり得るし、訪れる人を魅了するものともなる。京丹後市として、新たな絹・シルク産業と文化の創造・発信に取り組む。

◇市民が日常の中で絹を身に着けるなど、地域全体が絹を丁寧に扱い、和の文化、きもの文化を大切に守り育てるとともに、その用途を広げる努力を行い続けていくことが基本となる。和装産業の発展は、和の文化の継承・発展の一環でもある。

◇「シルク産業の活性化」や「シルク文化を活用した魅力ある地域づくり」に向け、わが国のシルクに関連する産業や歴史・文化を持つ都市と連携し、お互いに智慧を出し合い、将来を展望して実践する。

(3) 絹・シルクに関する情報発信地として

◇絹・シルクは、世界中の人々の生活を心豊かで質の高いものにすることができると認められる素材。これらは、伝統と革新により鍛え上げられた産業の力と、歴史的意味を守り地域に受け継がれてきた文化の力によって、さらに厚みが増すものでもある。

◇かつて、東西の交流が絹によって生まれ、シルクロードによって産業と文化の交流を生み、多くの人々の相互体験により、双方の産業力・文化力が高まり、世界的な発展を遂げてきた。地域においてこれまでに培われた絹・シルク産業とシルク文化を掘り起し、発信することで、京丹後の新たな物語を市民、事業者、行政等それぞれがその役割を分担し、連携して創造する。

4. 具体的対応

丹後ちりめん創業300年を迎え、わが国においては、東京オリンピック・パラリンピックが開催される2020（平成32）年を目標として、具体的な取組みを進める。その成果を活かし、5年後の2024（平成36）年に向け

て、「絹のふるさと」としてさらなる展開を図る。

(1) 絹・シルクに関する産業と人材の集積化の取組み

① 2020（平成32）年に向けて取組むこと

A. 知のネットワークの構築・強化・活用

絹・シルク産業の多面的展開に向けた学術的根拠を確保するため、国内外の蚕及び絹の研究者ネットワークをはじめ、関係大学などとの学官連携体制を京丹後市が結接点となり構築し、産学官連携による取組みを支援・促進する。

B. 絹・シルク関連産業の集積・拡大及び環境整備

- ・桑の栽培面積の拡大と蚕の人工飼料での飼育の他、桑育を組み込む等、京丹後産繭周年生産の産業化推進に向けて、事業者への支援制度を強化するとともに、旧溝谷小施設において絹・シルクに関する研究活動（高機能性シルクの研究と絹・シルクの用途開発の促進及び遺伝子組み換え蚕の飼育環境等）を推進し、その成果を市内事業者（予定者を含む）へ提供し、創業及び企業集積を促進するとともに、必要な規制の撤廃・緩和を国に対して求める。
- ・国内の養蚕事業者（周年養蚕を含む）と連携し、養蚕技術の向上を図るとともに、地域と連携しながら、休耕田に桑を植える取組みを進める。

C. 絹・シルク関連産業人材の確保・育成

絹・シルク産業人材の確保と育成を図り、起業もしくは市内事業者（予定者を含む）への就業をめざすとともに、織物技術者の確保と人材育成を通して、後継者不足などが顕著となっている当地の活性化につなげる。

D. 絹・シルク関連産地の形成

- ・農地の確保から桑の生産、養蚕、新商品開発・販売までのすべてを農商工の連携により地域が一貫して担い、純国産での絹・シルク製品の生産をめざす。
- ・周年養蚕を確立し、高クオリティでトレーサビリティの明確な純国産の丹後繭・生糸を産出するとともに、商品化に向けた取組みを推進する。
- ・広幅織機を導入する等、「洋」の分野への展開を図る絹・シルク関連業界の多様なニーズに対応する。
- ・後継者不足など諸事情で技術伝承が困難となっている他地域の絹・シルク関連技術を積極的に継承する。

E. 都市間連携の強化

シルクのまちづくり市区町村協議会（事務局：京丹後市）、全国和装

産地市町村協議会（事務局：京都市）及び絹のみち広域連携プロジェクト（事務局：関東経済産業局）への参画、さらには発展的なこれらの連携に取り組む。

また、都市間連携の強化による国内外での地域を超えた事業者連携や新ブランド・新商品の開発等シルク産業の活性化やシルク文化を活用した魅力ある地域づくりを推進する。

F. 丹後織物工業組合の機能強化

日本の絹精練工場として、受注量の維持・確保を行いつつ、技術者の育成及び必要な設備更新を図り、地場産業についての観光産業拠点としての充実をめざすとともに、セリシンを活用するなど新たなビジネス展開に向け、産学官連携による新加工技術の研究開発や製品の用途開発を図る等組合独自の取組促進に向け、市との連携をさらに強化する。

G. 2020年プロジェクトの構想と始動

- ・2020年開催の東京オリンピック・パラリンピックでの和装文化の世界発信に向け、「夏きもの」「カジュアルきもの」「コスプレきもの」「外国人向けきもの」「洗えるきもの」「軽いちりめん」等、新たな切り口でのきものを開発する中小企業者の連携体（又は丹後織物工業組合）の取組みを支援する。
- ・「TANGOシルク（仮称）ブランドプロデューサー」を招聘し、丹後織物技術等を活用した新ブランドを設立し、中小企業者の連携体（又は丹後織物工業組合）の海外展開の取組みを支援するとともに、海外展示会への出展及び海外拠点事務所を設置についての検討を行う。

②2024（平成36）年に向けて取組むこと

H. ブランドの維持・強化と海外展開の推進、インバウンドの促進

TANGOシルク（仮称）ブランドの優位性を維持・拡大するため、技術力の向上、経験・ノウハウの習得、人材育成等の取組みを充実させつつ、外部専門家等を活用して海外展示会への出展、海外の市場調査や拠点事務所の設置などとともに、産地見学・ビジネスルートを整備・提供を行い、海外からの誘客を促進する。

（2）絹・シルクへの愛着と誇りを育むための取組み

①2020（平成32）年に向けて取組むこと

I. 学校教育・社会教育の推進

小中学生や一般家庭での桑栽培や養蚕体験、小中学生及びその親を対象としたきもの等着方教育など、絹・シルク文化に触れる機会を学校及び家庭において提供できるよう取組むとともに、教育者へ対する

人材育成を強化し、丹後ちりめんの昔、今、未来を学ぶ「丹後学」なる教育を通して、子供たちが京丹後に誇りを持てるよう取組む。

J. 歴史の理解促進と先人の顕彰

丹後ちりめんの歴史、及び古くは「あしぎぬ」に関する歴史について、講座等を開催するとともに、先人（絹屋佐平治）の知恵と努力を顕彰し、市民等の理解の促進を図る。また、産地技術や産地の成り立ち・歴史など、現代に伝わる丹後ちりめんのさらなる理解の促進に向け、織物ミュージアム（仮称）の設置などの必要性を検討する。

K. 和装振興を地域振興、観光振興に

和装振興を地域振興、観光振興につなげるため、きもので行きたいお店や場所をピックアップし、きものの似合う場所の情報を発信するとともに、京丹後ちりめん祭を拡大・充実し、地域を代表するイベントとして、及びきものを着ていく場としての認知向上を図る。

② 2024（平成36）年に向けて取組むこと

L. 丹後ちりめんへの敬愛の醸成

絹・シルク文化に触れる取組みを、学校教育・社会教育でも継続しながら、誰もが和文化に親しめる環境を維持し、また、丹後ちりめんへの敬愛の醸成を図る。

（3）絹・シルクの情報発信地化の取組み

① 2020（平成32）年に向けて取組むこと

M. 情報発信の推進

- ・絹文化の普及啓発のために、京丹後の歴史、伝説、神社、史跡などをとりまとめ、絹関連情報として発信する。また、施設と産地体験等の連携による広域観光ルートを開発し、パブリシティ強化による国内外との交流を促進し、相互体験する取組みを推進する中で、全国和装産地市町村協議会（事務局：京都市）とも連携し、和装振興に関する取組情報等の積極発信を行うことにより、和装のユネスコ無形文化遺産登録をめざす
- ・「絹のふるさと京丹後」のキャッチコピーやロゴマークを作成し、様々な用途に活用。京丹後が絹の産地、絹のまちであることを対外的に周知する。
- ・丹後ちりめん小唄踊りの伝承を支援するとともに、丹後小町踊り子隊を国内外へ派遣し、きもの姿、丹後ちりめんのPR活動を行う。
- ・丹後ちりめんを用いた土産物、レンタル着物等、外国人観光客をターゲットにした取組みを進める。

② 2024（平成36）年に向けて取組むこと

N. 絹のふるさと京丹後の認知拡大

和装分野での絹・丹後ちりめんはもちろん、和装以外のあらゆる分野で丹後絹の認知とそのファンを増やし、「絹のふるさと京丹後」の存在を情報発信することによって内外に周知を図る。

(4) プランの推進について

絹のふるさと京丹後推進会議は、本プランを計画的に推進し、評価、見直し、さらには新たな事業展開についての検討を行い、本プランの計画的な事業展開が図れるよう進行管理を行う。

5. 終わりに

このプランは、絹に関わる事業者及び業界団体の絶え間ない革新と挑戦、そして絹・シルクに興味を持つ多くの方々の学習と触れ合いによって、京丹後が、絹のふるさととして、地域もつながり世界へつながることを達成しようとするものである。

絹・シルクが、地域はもとより、日本にとって、さらには世界にとっても重要なものだという認識に立脚し、技術や感性といった地域特有の風土・慣習に培われた力を活かして新たな価値を生むことを期待して、具体的な検討を重ねたものである。

このプランにより、義務教育課程において市内全ての学校にて絹産業・絹文化に触れる機会が創出され、また、着実に推進されることにより、目標が達成されることを期待するものである。

絹のふるさと京丹後推進会議

渡邊	正義	一般社団法人 日本絹人織織物工業副会長/丹後織物工業組合理事長
上野	千秋	日本絹人織織物工業組合連合会専務理事
安藤	俊幸	一般財団法人 大日本蚕糸会常務理事
松田	正夫	一般社団法人 日本繊維機械学会 繊維・未来塾塾長
吉岡	幸雄	染織史家
若林	靖永	京都大学経営管理大学院教授
松本	明彦	京丹後市教育委員会教育理事兼総括指導主事
田崎	敬章	京丹後市文化協会会長
水野	孝典	〃 (平成27年4月24日~9月15日)
久保	幸司	〃 (~平成27年4月24日)
大橋	明子	京丹後市商工会女性部長
井上	肇	京丹後市きもの交流会会長
西途	陽子	〃 (~平成27年7月15日)
田茂井	勇人	TANGO+/丹後織物工業組合理事
竹中	沙織	わたしたちの未来をつくる会/丹後小町踊り子隊(京丹後市商工会内)

*オブザーバー

梶谷	泰博	京都府丹後広域振興局農林商工部長
高田	慶一郎	京都府織物・機械金属振興センター所長(平成27年4月1日~) 京都府商工労働観光部染織・工芸課長(~平成27年3月31日)
野村	泰好	京都府織物・機械金属振興センター所長(~平成27年3月31日)
森木	隆浩	京都府商工労働観光部染織・工芸課長(平成27年4月1日~)

(敬称略・順不同)